

聖書を読まなかった修道僧ルター

— 中世末期および近世初期の宗教書、信心書 —

吉田 正彦*

はじめに

1517年10月末、ヴィッテンベルクの城教会の扉に「九十五か条の提題^{テーゼ}」が貼り出された。同時に「提題」は印刷機で複製され、宗教改革の思想は2週間のうちにドイツ全土に伝えられたという。交通路未発達^{のろし}の時代、脅威的な速さである。こうしてルター Martin Luther(1483-1546)による宗教改革の狼煙^{のろし}が上げられた。それから5年、彼は新たな原典に基き、ドイツ語訳新約聖書を完成する。キリスト教の新しい時代が始まった。

中世カトリックの時代、キリスト教会は聖職者にも、また平信徒に対しても敬虔さを求めた。製紙法の発達によりキリスト磔刑図や聖人像が木版面に摺られ、教会から家庭の居間に入って行く。一方貴顕や上層市民は彩り鮮やかな挿絵入りの写本を造らせた。そして中世末になると、彼らの手には木版挿絵入りの種々の信心書が、聖職者には伝統的な宗教書が刊本になって渡された。だがその殆どは中世に造られた写本の忠実な模倣^{コピ}に留まる。複製の新しい時代を迎えながらも、その素材は中世以来変っていなかったのである。

ではこの時代にどのような宗教書、信心書が聖職者に、また一般信者のもとに届けられたのか。ルターのドイツ語訳聖書に先立つ初期印刷本の

*よしだ・まさひこ／明治大学文学部教授／ドイツ文学専攻

リストを辿りつつ、一般信者向けの信心書を主に紹介する。本学図書館蔵「零葉コレクション」に含まれるものも多い†。

第一章

ある時 / 彼が本を一冊一冊 / よい本に出会えるかと見ていると
/ 生れて此の方一度も目にしたことのない / ラテン語の聖書が
目にとまった / そこで彼はその聖書に、一般のポステイラや、
いつも教会の説教壇からなされるはみし釈義に出てくるよりも / はる
かに多くの原典 / 使徒書簡と福音書が含まれていることに / 気
付いて多に驚いた。旧約聖書のあちこちを見て / 彼はサム
エルとその母ハンナの物語にくると / それを心から楽しみ喜
びながら急いで読み通した / そしてこれが全て彼にとって新
しいことであったので / 彼は心の底から願い始めた / われら
の信ずべき神がいつの日か、こうした本を自分で所有するこ
とができるようにして下さるようにと…

マルティン・ルターにまつわる広く知られた「伝説」の一話である。ルター伝にこの挿話を書き添えたのはヨハネス・マテジウス (1504-65)。ラテン語学校長を経て 1540 年にルターの会食会に加わった聖職者である。彼によると、聖書を「発見」したのはエアフルト大学の図書館でのこと。旧約新約を備えた、聖ヒエロニムスによるラテン語訳ウルガタ聖書だったはずで、ルターにとって大きな出来事であった。ではこれは何時のことなのか。ルターがエアフルトに滞在したのは 1501 年 4 月から。当時のドイツでは主要な都市である。ルターはこの大学で先ず自由七学科を、1505 年 5 月からは父の願いに従って法律学を学んでいる。彼が図書館で聖書を初めて手にしたのがこの時期なのか、あるいは更に後年の短期滞在時のことなのかは分らない。だが法学を学び始めて三月も経たない 7 月 2 日、マンズフェルトへの旅の途上、ルターはシュトットテルンハイムで雷に打たれ、まるでパウロのようにこの月の半ばには突如友に別れを告げて、この地のアウグスティヌス隠修士会の修道院に入ってしまう。こうして、やがて宗

教改革の「現場」となるあのヴィッテンベルクの大学で教鞭をとる 1508 年迄の、神学の徒としての修行時代が始まるのである。

ところでルターがこの会食会で行ったスピーチを神学者ヨーハン・アウリファーバー (1519-75) が記録し、『食卓談義』として 1566 年に刊行している。その序文によると「以前教皇権のもとでは / 聖書は誰にも知られていなかった / 神学博士たちさえ / 自身でそれを読んだことはなかった / M. ルター博士が度々語るところによると / アンドレーアス・カルルシュタト博士は / 神学博士になって 8 年後に初めて / 聖書を読み始めた」のだという。ルターが初めて聖書を手にしたのが何時であるにせよ、この証言による限り、それは手元にあつて何時でも読むことのできる書物ではなかったのみならず、神学に携わる者でさえそれを目にするという恩恵に浴することは稀であつたわけである。既にグーテンベルクによるラテン語聖書が刊行されて半世紀余を経た時代であり、また多くの初期印刷本を収蔵する大英図書館の揺籃本目録には、ドイツで刊行された聖書に限ってもラテン語訳 52 点 (内リールのニコラウス等によるポスティラ付きは 8 点)、ドイツ語訳 13 点、更に 2 点のチェコ語訳が挙げられているのではないか。ではルターは独自の誇張表現を弄したのだろうか。

南独バイエルン州の都市アイヒシュテト。八世紀半ばに中部および南部ドイツの各地で活発に布教活動を行って原住民を改宗させた「ドイツ人のための使徒」、ベネディクト修道会士ボニファティウス (673?-754) が修道院を建立し、741 年には新たな司教区とした町である。それ以来多くの教会堂の^{そび}聳える宗教都市に発展する。こうした歴史的背景のもとにここには多くの写本や書籍が残され、今日では国立バイエルン図書館アイヒシュテト分室を始めとする六つの図書館施設に収蔵されている。その殆どが教会財産の国有化 (1803 年か) の結果、この町を中心とする 25 (その内アイヒシュテト 8) の修道院や修道参事会、司教座聖堂参事会およびそれらの付属図書室から集められたものであり、当然のことながら宗教書が圧倒的に多い。なかには個人が所蔵していたものもあるが、その場合は所有者の殆どが司教を初めとする高位聖職者あるいは学者である。また三十年戦争などの戦禍により失われたり、1800 年 7 月にはナポレオン軍の将軍に持ち去られたまま行方の分らないものもあるといい、1787 年迄所蔵が記録される

グーテンベルクの四十二行聖書もその際に犠牲になったひとつだという。ところでこの六つの図書館施設に現在収蔵されている蔵書の内、1500年迄に刊行されたいわゆるインキュナブラ挿籃本の目録が1968年にまとめられた。1085点、重複書を加えると1301点の詳細な記録である。ここに含まれる聖書は9点(内4点は同じ版)で全てラテン語、即ち聖ヒエロニムス訳による聖書である。因みに1点を除き、グロッサやポスティラ等が付されている。教会財産の国有化によりこれらの聖書が公の図書館施設に移管される以前の所有者については、出所あるいは履歴の不明な個人蔵が1点ずつ、1535年8月13日の銘記がある司教レオンハルト・ハラーの所蔵した1点、それぞれ1537年と1739年と収蔵年が記される司教および学者の個人蔵書1点ずつ—これらはその後修道院等の施設に寄託され、国有化された—、他の4点は同一修道院の所蔵が2点、大修道院と修道参事会1点ずつの旧蔵である。グーテンベルク以降凡そ半世紀の間の、一地方の記録に過ぎない。25に及ぶ宗教施設でルター時代に修道僧が手にすることができたであろう聖書は、最後の4点ということになる。これで見ると限りではルターの証言もあながち誇張ではなかったと言わざるを得ないであろう。こうした事情は、グーテンベルク以前の写本の時代でも同様であったと思われる。

とはいえ中世においても、またルターはんどくの時代にあってもローマ法皇庁が聖書の所持、あるいは繙読を禁じた形跡はない。だが、聖書を聖職者の管理のもとに置くよう求めたであろうことは想像に難くないし、教会外の特に秘密の会合で聖書を読むことに関しては、1199年に教皇インノケンティウス三世が禁止しているものの、教会主導の聖書講読については言及されることはない。また十三世紀になると、1229年、1234年と続くフランスのトゥールーズ、スペインのタラゴーナの両公会議は、平信徒が近代語による翻訳聖書を所持することを禁じ、1408年の第4回オクスフォード公会議に至ってはウィクリフによる1348年の英語訳聖書が槍玉にあがっている。即ち、ウィクリフ聖書もまたそれ以降に作成される近代語訳聖書も、司教あるいは管区会議により承認されない限りは禁止された。活版印刷機の実用化後にはドイツでもマインツ大司教ベルトルト(在位1485-86)が、明確に認可されていない全てのドイツ語訳聖書について、これを印刷、販売した者を「破門」するとしている。こうした措置を見る限り、ローマ・

カトリック教会にとって聖書の繙読は禁止しないものの、特に薦めることではなく、しかも読むことが許されるのはラテン語訳聖書のみであった。それも、教父聖ヒエロニムス(347?-419)による、いわゆるウルガタ聖書であった。それ故ラテン語の知識を持たない一般の信徒が聖書を読む機会はなく、また縦令^{たとい}彼等が母国語訳の聖書を手にする機会があったとしても、教会はそれを読むことを禁じている。聖職者の指導なしに自力で聖書を繙^{ひもと}くことにより、教会の教えから外れる危険があるから、というのが教会当局の主張である。だが、聖都アイヒシュテットの例からも分るように、修道僧であっても、教会は聖書の繙読を求めなかったらしいのである。

修道僧であれ、また一般信徒であれ、彼等が聖書を手にし、そこに述べられた個々の記述をそれぞれに解釈するとしたらどうであろうか。それを許すには聖書は余にも難解であり、比喩的な表現が多過ぎる、そう教皇庁は考えた。それらひとつひとつの個所、表現については初期教父時代から一定の神学的解釈がなされてきたではないか。確かにそうした「正統的」な解釈から外れた、独自の解釈が行われたこともある。だがそのような聖書理解を行い、それを盾に行動を起こした者は公会議により異端者—その多くは熱烈な信者であった—とされ、断罪されてきた。その結果教会当局の主張に従えば、聖職を志す者にとって最も大切なのは、古来多くの賢人たちが行って来た正統な聖書解釈を学び、理解することなのである。そうした修行を行ってこそ、修道僧はやがて一般の信徒に対してイエスの教えを「正しく」説き、彼らをイエスの「正しい」教えに導くことができるはずであった。長きにわたって実践されてきた伝統—神の言葉、イエスの言葉に隠された唯一の、分ち難い真理を、専ら旧来の解釈を通して学び取ることによってのみ、神の教えに沿うことができる—。それ故司教などの高位聖職者はもとより修道僧にとっても、聖書は必ずしもそれ自体を読む必要のないもの、否、繙読し自らの判断に従って理解してはならないものであった。ローマ教皇庁は聖書の解釈に関してそれ程までに慎重だったのである。

第二章

では聖職者のもとより平信徒たちはどのような宗教書に触れていたのでしょうか。先ず挙げることができるのは、前述したアイヒシュテットのラテン語聖書のほとんどに付されていたグロッサやポスティラの類である。グロッサ *Glossa* とは聖書や教令、哲学書等の語句に関する註釈であり、ポスティラ *Postilla* は同じく聖書や典礼文の註解、傍註をいう。前者はペトルス・ロンバルドゥス *Petrus Lombardus*(1095/1100-1160) の著作『詩編語句註解 *Glossa in Psalmos*』、後者はトマス・アクィナス (1124/25-74) 『詩編註解 *Postilla super Psalmos*』のように通常は聖書の各書毎にまとめられるが、「ミサ全書 *Plenarium*」などでも聖書からの引用章句にポスティラが付されている。因みに中世末の「ミサ全書」とは教会用の「ミサ典書 *Missale*」(聖書の引用章句、ミサの祈祷文、聖歌、典礼法規等を全て収める典書)を範にした私誦ミサの近代語訳テキストで、日曜や祝祭日のミサで用いられ、教会暦に沿って福音書や書簡からの引用章句がポスティラ付きで収められた。平信徒のための信心書であるところから、挿絵が挿入されるのもこの書の特徴であり、日曜と主な祝祭日には大きな挿絵が、聖人の記念日には小さい挿絵が施された。ルターのドイツ語聖書が登場するまでの半世紀が最盛期で、その間に約 60 点のドイツ語版が出版され、後述する「人類救済鑑」と共に中世末のドイツ人の宗教生活に大きな意味を持った。これらの他にも聖書の註解は古来数多く残されたが、そのうち教会当局に認められたもののみがその時々羊皮紙に書き写されて読み継がれることになる。それらは註解 (*expositio*, *lectura*, *commentarius*, *interpretatio*)、講話 (*collatio*, *homilia*)、討論集あるいは問題集 (*quaestio*)、摘要 (*epitoma*) などと名付けられて修道僧の座右の書となる。例を挙げるならば、

Expositio super Isaiam ad litteram イザヤ書逐語註解

Lectura super Epistolam ad Ephesios エフェソ書註解

Commentarius in Evangelium Johannis ヨハネ福音書註解

Interpretatio Cantici Canticorum 雅歌註解

Collationes in Evangelium Johannis ヨハネ福音書講話

Homiliae in Psalmos 詩編講話；*Homiliae Evangelii* 福音書説教集

Quaestiones Parisienses(エックハルトの)パリ討論集;*Quaestiones et solutiones in Genesim* 創世記問答;*Quaestiones in quartum Sententiarum* 命題集第四卷註解

Epitome Dindimi in philosophiam 哲学についてのディンディムスの摘要という具合に、その殆どがラテン語による。もっとも前述のように、これらにおいても聖書からの引用章句は近代語に翻訳されることも稀ではないのだが。ルターの時代には修道僧はこの他にも種々の表題を付した註解註釈書や戒律の書、また聖務日課書にも触れていたはずである。修道院を始め教会施設の図書室には中世以来数多の写本が収められており、また印刷機の発明以降はそれらの写本をもとに膨大な数の宗教書が短時日のうちに刊行されたからである。こうして修道僧たちはこれら註解書の類を通じ、部分的にはあるが、聖書に触れていたことになる。これに対し平信徒向けの宗教書は、内容においても点数においてもかなり限られていた。印刷の際に原稿の役割を果たすべき中世以来の写本に制約があったからである。

カトリック教会では古くからミサ聖祭の際に福音書奉読集 *Evangeliarium* とその抜粋章句集 *Evangelistarium*、書簡集 *Epistolarium*、サクラメンタリウム *Sacramentarium*、ミサ典書、そして交唱聖歌集 *Antiphonar* が用いられた。一方聖職者にはまた、一定の時間に祈りを捧げることが「聖務日課 *Horae canonicae*」として定められている。時代、地域また宗派による異同はあるが、現在では一日の最初の定時課である「聖書朗読」と「朝課」、夕方の定時課「晩課」、その日の最後に行われる「終課」、そしてその間には小定時課、即ち三時課(午前9時)、六時課(正午)、九時課(午後3時)が配されるのが通常である。聖職者は定時課毎に定められた詩編や聖書の引用個所の朗読、賛歌の詠唱などを決められた順で行わなければならない。こうした慣行を日々の聖務日課に支障が生じないようにする目的で、諸書に別々に収められていた詩編や賛歌 *Hymnus* などをひとつの書物にまとめたのが、先に述べた「聖務日課書 *Breviarium*」である。ここには通例「教会祝日暦 *Kalendarium*」、暦に基いて日毎に定められている特定典礼文二種、即ち「聖節の部 *Proprium de tempore*」と「聖人祝日の部 *Proprium de Sanctis / Proprium Sanctorum*」が収められる。これに旧約聖書からダヴィデの150の詩編 *Psalter* や頌歌、カンティカ賛美歌を加えたラテン語訳の「詩編集 *Psalterium*」、更には「連祷 *Litanei*」などが加えられる場合が多かった。

ところでカロリング王朝期以来十三世紀まで、一般信徒向けの典型的な信心書としても「詩編集」があった。本来のダヴィデの「詩編」に加え、十三世紀になると教会暦、数篇の祈り(神への賛美「テ・デウム Te Deum」、聖務日課の晩歌で唱えられるマリア賛歌「マグニフィカート Magnifikat」、朝課で歌われる洗礼者ヨハネ賛歌「ベネディクトゥス Benedictus」など)が収められ、多彩な挿絵で飾られる。これが「時祷書 Horarium」、すなわち平信徒向けの聖務日課書の前身であった。因みにラテン語の hora は英語では hour(ドイツ語 Stunde)。時祷書はラテン語あるいは近代語で書かれて、特にフランスで Livre d'heures として好まれた。日々の聖務 Officium の定時課 Hora で唱える詩編や祈祷文等の抜粋に、平信徒向けならではの多くの彩色挿絵を添えた信心書である。その最もよく知られる写本がジャン・ベリー侯(1340-1416)のシャンティエユの時祷書であることは言う迄もない。

「時祷書」が平信徒に最も好まれる信心書であった理由は、そこに収められた種々の祈祷文、すなわち「祈り」故に、と言うよりはむしろ多彩な挿絵のためと言うべきであろう。先ずここに収められる標準的な祈祷文を見ておこう。通常巻頭に置かれる「教会祝日暦」に続き福音書抜粋、「マリア聖務日課 Marienstunden/-officium」、詩編から第 6、32、38、51、102、130、143 の 7 篇を取めた「悔悛詩編 Bußpsalmen」、「連祷」、「十字架聖務日課 Kreuzesstunden/-officium」、「聖霊聖務日課 Heilig-Geist-Stunden/-Officium」、「諸聖人代願の祈り Heiligensuffragien」、そして「死者のための聖務日課 Totenofficium」の、夫々の「祈り」である。これに「聖母マリアのミサ Marienmesse/-gebet」が加わる等、時代や地域により内容や配列に異同はあるものの、特に「マリア聖務日課」は欠くことができない。正式には「幸いなる^{おとめ}処女マリアの小聖務日課 Horae Beatae Mariae Virginis(Hor[a]e BMV/ Officium parvum BMV)」と言い、ローマ聖務日課書に倣って通常のマリアの祝日以外の日に聖母に捧げる聖務日課のための祈りの書で、一般信徒向けの時祷書の核を成す。この小聖務日課書は十世紀には既にその形が成立していたと考えられ、十一世紀になると枢機卿ペトルス・ダミアニ(1007-72)により修道僧に普及し、教皇ウルバヌス二世(在位 1088-99)が土曜日をこの小聖務日課の日としたためにアウグスティヌス修道会、ドミ

ニコ会など幾つかの修道会に広まり、中世晚期以降「時祷書」は一般の信徒にも知られるようになった。

平信徒の手に渡って以降の時祷書の特徴が、先に述べた挿絵であろう。ここでもまた今日に残される写本から一例を挙げるならば、1460年頃にフランドルのゲントあるいはブリュージュで作成された時祷書では、ラテン語の祈祷文が182×130mm(写字面120×72mm)の羊皮紙112葉に多数の装飾頭文字を^{ちりば}鏤めて記されている。問題の挿絵は福音書抜粋と代願の祈りの部分には、四福音書記者と殉教聖人たちが夫々にシンボルを添えて一毛皮をまとった洗礼者ヨハネは砦を背に神の仔羊に挨拶をし、ペテロとパウロは教会堂の内陣に、アンデレはX型の十字架と共に、ステパノは自分の命を奪った石を肩掛け袋に拾い集め、アンティオキアのマルガレータは有翼の竜の背に…と、16枚の図(約35×40mm)に描かれ、上下の余白は花と蔓草の模様で飾られている。他の祈祷文には聖母マリアとヨハネのいるゴルゴダ(カルヴァリ)の丘の磔刑、聖霊降臨の奇蹟、天使たちの合奏、受胎告知、イエスの誕生等々、14に及ぶ図(約120×65mm)も配される。また教会祝日暦には、この地方独自に崇拜された聖人13人の名も書き加えられている。

この例からも伺えるように時祷書は夫々に、あたかもこれを所持する者の信仰の深さを誇示するかのようになり、聖書の幾つかの場面や聖人たちを描いた数多くの挿絵に彩られており、また暦に登場する聖人たちのみならず、時には祈祷文の選択も、それが用いられた地方の特色を私たちに暗示することが多い。例えば1470年頃に恐らくは前の例と同じブリュージュでつくられ、イギリスのソールズベリーで用いられた時祷書は「幸いなる処女マリアの小聖務日課」と並んで国家の聖人聖ジョージへの祈りや、カンタベリーの僧正であった聖トマス・ベケットへの賛歌を取める、というように。また時代による特徴を挙げるならば、1500年を挟む数十年の間に制作された手写本「時祷書」はいずれも、暦と祈祷書の全てのページの上下に装飾野が施されている。時祷書は印刷機登場以後の時代にもしくは写本が好まれたために揺籃本はむしろ稀らしく、印刷される場合にも羊皮紙に金属版面あるいは木版面によって、写本を真似た手彩色の挿絵が金属活字文と並ぶことになる。

平信徒向けの信心書にはこれらの他に、やはり近代語による挿絵入り「祈祷書 Gebetbuch」や「賛歌集 Hymnar」がある。これらの幾つかも、今日に残される写本によって見ておこう。先ず低地ドイツ語による1506年1月9日の日付がある写本の祈祷書である。約137×93mmの羊皮紙90葉、写字面は約96×72mm。文字は褐色と赤のインクで書かれ、装飾頭文字は赤と青だが、5つは金地に豪華な装飾文字。欄外には蔓草模様に小鳥、花、果実等が緑、赤、青色で描かれ、一部は金または白色で効果を高めている。内容は秘蹟 Sacrament 受け入れの祈り、マリアの祈り、聖グレゴール、聖アンナ、聖バルバラ夫々への祈り、聖カタリナへの祈りのツィクルス。因みに祈祷書には当局の許可を得たものもあるが、これは平信徒向け、無許可のものか。また聖カタリナはライン河下流クサンテンの守護聖人であることから、この祈祷書の使われていた地域が推測できる。信心書でも時祷書の場合同様、祈りの対象となる地域の聖人が描かれるからである。例えば十五世紀に北ドイツで制作された祈祷書では、この地方で崇拜されたスウェーデンの聖ブリギッタへの祈りが収められている。次に「賛歌集」は神、あるいは聖人への賛美歌集である。ここでは1640年頃にスイスの恐らくはバーゼルで作成されたラテン語写本を例に、その内容を紹介しよう。先ず聖人たちへの「賛歌」、「交唱」、聖務日課から「祈り Oratio」が教会祝日曆に従って並べられ、巻末には「連祷」と「代願 Fürbitte」とが、93×52mmの羊皮紙に褐色のインクで書き記されている。また44×42mmの大きさの127の装飾挿絵が、緑、青、赤、灰、黒、白、ピンク、金色の顔料により聖人伝や新約聖書の幾つもの場面を信徒たちに示している。聖トマス、聖カタリナ、聖アンデレ、聖マルコ、聖フランチェスコなど数多くの聖人は夫々に素姓を特定させる持物^{しぶつ}Attributを添えて描かれ、また新約聖書からは受胎告知、キリストの復活と昇天なども、聖人たち同様にワインレッドの地に金文字で説明を付して信者の視覚に訴えている。

中世末、近世初期の時代にはこうして、時祷書を始めとする多彩な挿絵入りの書物が信徒たちの信仰心を駆りたてた。日々の祈りを促すこうした書の他にも、聖ヒエロニムスの「初期教父伝 Leben der heiligen Altväter」はもちろんのこと、ヤコブス・デ・ヴォラギネ Jacobus de Voragine(1226頃-98)のあの「黄金伝説 Legenda aurea」と原題による「諸聖人の生涯 Leben der

Heiligen」、「キリストのご受難 Passional」、彼の影響の下に中世末期に作られた「聖人物語 Heiligenleben」、後にイグナティウス・デ・ロヨラに絶大な影響を与えるザクセンのルドルフス Ludolphus de Saxonia(1295/1300-1378)の「キリストの生涯 Vita Christi」やシュテファン・フリードリヒ Stéphan Fridolin(1430?-98)によるキリスト受難伝「宝石篋^{ばこ} Schatzbehälter」も、写本や印刷本を通して信徒たちの信仰心を煽りたてた。だが旧約聖書であれ新約聖書であれ、「詩編」や福音書の抜粋や要約など、一部の書から様々な信心書に引用されたものを除けば、冒頭に挙げたルターの言葉をまつまでもなく、聖職者以上に平信徒の目に聖書が触れることは稀であった。それに代って一種の民衆本として彼らの手に渡ったのが、ドイツでは「聖書物語 Historienbibel」であった。

グーテンベルクが印刷機を発明した頃、ドイツ領アルザスのハーゲナウに、紙を用いた写本を作成して手広く販売する男がいた。写生字あがりの書店主はディーボルト・ラウバー Diebold Lauber。最盛期には彼のもとで4、5人の写生字と12、3人の挿絵師が、分業で写字、挿絵と彩色とを担当し、挿絵入りの信心書や実用書、娯楽ものを量産したという。写本の納入先は騎士の館や領主の城、ライン河上流から中流域の多くの都市や、南ドイツのシュヴァーベンやスイスの都市貴族、上層の市民である。このラウバーが1447年頃に作成した宣伝用の在庫リストが残されており、そこには旧約新約を合せた聖書、ミサ全書、旧約聖書から「列王記」、「詩編」が各1部ずつ挙がっている。それに対し「聖書物語」は10部を上回る。これ程の需要があった「聖書物語」とはどのような内容なのだろうか。

聖書物語は十四世紀初頭から十五世紀末まで、即ち近代語訳聖書が印刷、刊行される頃まで、一般信徒のみならず聖職者にも、信仰心の昂揚を目的に朗読され、教科書としても用いられた。「歴史の衣装をまとった宗教教育の書」と言われる所以である。その原典は旧約聖書のハガダー(律法以外の部分)、エウセビオス Eusebios(263/65-339/40)やヒエロニムス、セビリヤのイシドールス Isidorus(560?-636)等の年代記やその類書と考えられる。これらをもとに十二世紀にパリの神学者ペトルス・コメストル Petrus Comestor(1100?-87)によって聖書教育の教科書「スコラ学的聖書物語 Historia scholastica」が、ラテン語で編まれた。これが後に近代語に翻

訳され、ウルガタ聖書の記述を軸に、マリアの生涯など、外典や年代記の世俗の伝承などで肉付けされて自由に翻案され、挿絵入りの写本「聖書物語」として残されることになる。ドイツでは特に好まれ、今日でも方言による写本が百点ほど確認されており、そのうち 16 点がラウバーの工房で作られたものだという。その中から、1458 年頃にバイエルン・オーストリア地方の方言で紙に書かれた写本により、アダムの死の場面を見ておこう。「創世記」5 章 3 節以下と較べて頂きたい。

930 才になり、病のために死期の近いことを悟ったアダムは、かつて樂園で神の命に背いたことを嘆く。息子のセツは父のために樂園の門前に行き、父への慈悲を懇願する。応対した聖ミカエルはこれを拒んで言う、慈悲の木の実は、神による天地創造から 5200 年後に神の子が現われ、洗礼をお受けになった後に初めてもたらされる、「神を信じ…洗礼を受けた者たちの上に」と。その時になればお前の父も天国に行くことができよう。だがその代りに、と言ってミカエルは、かつてアダムが知恵の木の実を食べた際に落ちた種から生え育った樹の枝をセツに与える。六日後にアダムが亡くなると、セツは庭に父の亡骸を埋葬し、ミカエルから得たあの枝をアダムの口の上に挿した。後にこの地はカルヴァリと呼ばれ、アダムの口から生えた樹の材から造られた十字架によって一しかもこのカルヴァリの丘で一キリストはアダムと全ての人類とを救済することになる。

ここで作者はアダムをキリストに対応させ、また知恵の樹をキリスト磔刑の十字架に結び付けることで、信徒たちに神の救済の意味を平明に説き明かそうと試みる。新約聖書の出来事は旧約聖書に予示されているとして、両者の人物や出来事を照応させる予型論的解釈を駆使して説明しようとするのである。こうした試みは、既に中世末期には図版フロック・ブックを主体とした「貧者の聖書 *Biblia pauperum*」により、写本としてまた木版本として知られている。これに続く時代に同様の手法を用いて好まれたのが、テキストに重点を置いた「人類救済鑑 *Speculum humanae salvationis*」であった。一般信

徒にとって予型論による解釈法が理解し易かったことに加えて、聖書の出来事を民衆本並みの平易な物語として読むことができたからであろうか。

「人類救済鑑」は1324年頃にドミニコ会修道士により書かれたと言われ、「キリストの生涯」の作者ザクセンのルドルフスとの説もある一、ヨーロッパ中に広まって近代語に翻訳され、聖職者には説教用あるいは教材として、平信徒にはキリストの生涯と救済とを理解させる目的で挿絵入りの写本が、1480年頃には印刷本が造られている。導入部は新約聖書「ローマの信徒への手紙」に基いて、サタンとその眷属による人間とあらゆる創造物の墮落で始まり、エヴァの創造、アダムとエヴァの結婚、蛇の誘惑と知恵の木の実による墮罪、樂園追放とその後のアダムとエヴァ、ノアの方舟…と、「創世記」に従って救済の前段階の物語が語られる。これに続いてマリア誕生の告知が、他ならぬペトルス・コメストルの「スコラ学的聖書物語」から引用されて、救済の物語が45章にわたって物語られ、最後にキリストの受難の七つの場面、マリアの七つの悲しみと七つの喜びとが加えられる。そして「貧者の聖書」がキリストの生涯のひとつの場面に予型として旧約聖書からふたつの場面を照応させているのに対し、「救済鑑」では旧約聖書のみならず世俗の物語や博物誌さえ援用して三つの場面对置させるのである。例えばキリストと弟子たちによる最後の晩餐の場面は、荒野をさ迷うイスラエル人に天からマナ（パン即ち聖体の予型）が降る場面（「出エジプト記」16章）およびパンと葡萄酒によりアブラハムを祝福するメルキゼデク王（「創世記」14章）と、「貧者の聖書」と同じふたつの場面に、ここでは過越のすぎこし小羊（キリストの贖罪死の予型）の場面（「出エジプト記」12章）が加えられる。この合せて四つの場面が、各ページ二段組、見開き四段の夫々にひとつずつ挿絵として配され、全体で192の挿絵、5122行から成る。

ここまで見てきたように、一般の信徒たちの周囲には幾つかの信心書と、民衆本を模したやはり何点かの物語はあった。だが時祷書にせよ聖書物語にせよ、彼らの手に渡ったのは聖書そのものではない。またここに挙げた聖職者向け、平信徒向けの多様な写本や印刷本からも分るように、聖書の諸書の中でも「詩編」150篇は典礼やミサでの説教、教材などでしばしば朗読され、引用されて重要な役割りを果たしたことから、最も多くの近

代語訳が作られて信者に親しまれ(1939年の調査によると、1522年以前に高地ドイツ語訳写本173、低地ドイツ語訳74、部分訳236)、また前述した多くの註解書や註釈書などとの関連で「雅歌」や「黙示録」、旧約聖書の一部の書についても、「詩編」ほど多くはないが近代語訳はつくられている。「福音書」はまた四福音書の類似した記述を集めた「総合福音書 Evangelienharmonie」や「ミサ全書」を通して近代語訳が読まれたという。だがそれらも聖書そのものとは言えない。いや、実は十四世紀以降ルターの時代までに、断片を含めて36のドイツ語訳聖書の写本が確認されるとの調査や—例えばデヴォツィオ・モデルナ運動に影響を受けてヤン・フス Jan Hus(1340?-1415)の思想に近かったベーメン国王ヴェンツェル四世(1361-1419)には「ダニエル書」と「十二予言小書」を除く旧約聖書写本が献上された—、十五世紀には最初の近代語による全訳聖書の写本や印刷本聖書からの写本さえつくられて、ディーボルト・ラウバーの手で販売されたとも言われるのである。

それでは中世末からルターの時代に聖書はどのような状況にあったのか。印刷本ドイツ語訳聖書を中心に見ていこう。

第三章

1522年9月21日、ヴィッテンベルクのメルヒオール・ロターの印刷工房からドイツ語訳の新約聖書が出版された。マルティン・ルターによるいわゆる「九月聖書」である。印刷部数は恐らく三千部、頒価は二分の一グールドン、大工職人の週給に当る。彼が依拠したのは従来のようにラテン語版ウルガタ聖書ではなく、ロツテルダムのエラスムスによりバーゼルのフローベン印刷工房から1519年に刊行されたギリシャ語ラテン語版第2版であった。「ヨハネ黙示録」には、同じヴィッテンベルクのルーカス・クラナハによる大判の木版画が挿入されている。この聖書はこの年のうちにバーゼルでも出版され、それ以降は瞬く間もなくドイツ全土で印刷された。また1534年9月には旧約聖書を併せ、多くの外典も含んだ高地ドイツ語版完全訳聖書が、同じヴィッテンベルクのハンス・ルフトの工房で印刷されている。「誰もが神の言葉を聖書から直接読み取ることができるよ

うに」との主張をルターは実行に移したのであった、可能な限り多くの同朋に理解されるドイツ語を追求することによって。その結果、ルター訳聖書は標準ドイツ語の形成にも大きな影響を及ぼすことになるのである。

だがこの時代に聖書のドイツ語訳を志したのは一その目的は異なるもののルターだけではなかった。彼の聖書以前に既に18点ものドイツ語聖書が、しかもその多くが木版挿絵入りで刊行されていたのである。年代を追いながら並べてみよう。グーテンベルクによるラテン語版「四十二行聖書」からほぼ10年後に始まる。

1466年「メンテリン聖書」

シュトラースブルク ヨーハン・メンテリン Johann Mentelin(1410?-78)

1470年「エゲシュタイン聖書」(「メンテリン聖書」の改良版)

シュトラースブルク ハインリヒ・エゲシュタイン Heinrich Eggestein (1415/20-88以降)

1475年「ツアイナー聖書」

アウクスブルク ギュンター・ツアイナー Günther Zainer(?-1478)

1475年「プフランツマン聖書」

アウクスブルク ヨードクス・プフランツマン Jodocus Pflanzmann(生没年不明)

1476/78年「ゼンゼンシュミット聖書」(75年版「ツアイナー聖書」を模倣)

ニュルンベルク ヨーハン・ゼンゼンシュミット Johann Sensenschmidt(?-1491?)

1477年「ツアイナー聖書」

アウクスブルク ギュンター・ツアイナー Günther Zainer

1477年「ゾルク聖書」

アウクスブルク アントン・ゾルク Anton Sorg(1430?-1493?)

1478/79年「ケルン聖書」(低地ドイツ語版2種：ニーダー・ザクセン方言版と低ライン方言＝西低地ドイツ語版)

ケルン ハインリヒ・クヴェンテル Heinrich Quentel(1440?-1501)とボン近郊ウンケル出身のバルトロメウス Bartholomäus von Unckel(?-1484?)

1480年「ゾルク聖書」(77年版「ツアイナー聖書」の忠実な模倣版)

アウクスブルク アントン・ゾルク

1483年「コーベルガー聖書」(挿絵に「ケルン聖書」の版木を転用)

ニュルンベルク アントン・コーベルガー Anton Koberger(1440/45-1513)

1485年「グリューニンガー聖書」

シュトラースブルク ヨーハン・グリューニンガー Johann[es] Grüninger(1455?-1532?)

1487年「シェーンスペルガー聖書」

アウクスブルク ヨーハン・シェーンスペルガー(父)Johann Schönsperger d. Ä.(?-1523?)

- 1490 年「シェーンスペルガー聖書」
 アウクスブルク ヨーハン・シェーンスペルガー (父)
- 1494 年「リューブク聖書」(低地ドイツ語版)
 リューブク シュテフェン・アルンデス Steffen Arndes(生没年不明)
- 1507 年「オトマール聖書」
 アウクスブルク ヨーハン・オトマール Johann Otmar(?-1514?)
- 1518 年「オトマール聖書」
 アウクスブルク ジルヴァン・オトマール Sylvan Otmar(?-1539?)
- 1522 年「ハルバーシュタット聖書」(低地ドイツ語版)
 ハルバーシュタット ローレンツ・シュトウクス Lorenz Stuchs(生没年不明)

これらの特徴を挙げておくと、いずれの版もウルガタ聖書の^{フル・バイブル}完全訳であり、最初の「メンテリン聖書」は1350年頃バイエルンでつくられた写本に基く。印刷面での特徴は、版型がいずれも^{フォリオ}二折か四折り版、メンテリンとエゲシュタインは聖典のみを印刷して販売価格を抑制し、購入者が好みによって挿絵を描かせることを考えた一木版を用いて挿絵を印刷する技法は既に開発されていた。1475年のツアイナー版で初めて旧新両聖書の諸書の冒頭語の頭文字が木版に図像を添えて印刷されてからは、全てが挿絵入りになる。因みに1483年「コーベルガー聖書」は発行部数が多く、1000あるいは1500部か。次に注目すべきは18点のうち14聖書が南ドイツ、しかも半数の9点もがアウクスブルクで印刷されたことであろう。この町は十四世紀末頃から有力な商業都市に発展し、町とその周辺には製紙用水車が多数設置されて、ゾルクやシェーンスペルガー等、自前の水車を持つ印刷業者もあったという。これに対し4点の低地ドイツ語聖書に注目しなければならない。標準語という考え方がなかった時代である。方言としての大きな分類である南ドイツの高地ドイツ語と北ドイツの低地ドイツ語の、どちらによる聖書かということであり、ルターがドイツ全土に通用する翻訳に腐心したことと併せて、夫々の地域の信者に向けた聖書の存在がこれらによって確認できる。このうち特に「ケルン聖書」2種は夫々100を超える、「リューブク聖書」は152の、優れた木版挿絵により信者の聖書理解を促したという。

先に述べたように、この時代に教会当局により認められた聖書は教父ヒエロニムスによるラテン語訳ウルガタ聖書であった。そして上記の印刷本聖書も序文にヒエロニムスの名を記すことで、当局の意に沿った「ドイツ

語訳」であることを示している。だが実情は厳しかった。ニュルンベルクのコーベルガー工房で1809点もの挿絵を組み込んで印刷された「世界年代記 Liber chronicarum」(1493)の作者ハルトマン・シェーデル Hartmann Schedel(1440-1514)が残した書類綴りに「有益な指示、印刷術を使うに当って」と題するラテン語の書類が挟まれていたのである。用紙は透しからイタリア製、執筆者は不明だが、聖書のドイツ語訳出版を申し出た者に対する「判定書」である。とすれば筆跡の主は言うまでもなく教会当局。印刷機の普及に伴って近代語訳聖書が平信徒の手に渡ることを、当局は恐れたのである。判定書によると、一般信徒が何故近代語に翻訳された聖書を自分で読み、解釈してはいけないのか、11に及ぶ理由を挙げている。聖書を解釈するには知的才能に恵まれ、先行する諸書の解釈に十分に精通していることが必要である。ところがそれが印刷されて無教養で好奇心の強い一般信徒の手に渡ると、彼等は聖書の解釈について互いに話し合っ、神の言葉を聖職者の口から聞かなくなってしまう、その結果「異端」が生れるかもしれない。聖書は必ずしも字義どおりに解釈するのではなく、「神秘的に」理解すべきことが多く、同一文中に異なった意味を含む四つの解釈、即ち字義通りの意味、アレゴリックな意味、道徳的比喩的な意味、彼岸寓意的な意味を持つことさえしばしばある。この状況下で平信徒には聖書の文の本当の意味がすぐに分るのだろうか、と。

教会当局のこうした考えは十五世紀後半に始まったものではない。だが印刷機登場の今になって、教会当局がその権威の失われることを恐れたことは確かであろう。その結果、近代語訳聖書の原典は例外なく当局お墨付きの、教父聖ヒエロニウスによるラテン語ウルガタ聖書であるだけでなく、翻訳に当っては原文を可能な限り模倣すること、ウルガタの個々の言葉には聖霊が宿っているのであるから、翻訳に当っては近代語の文構造に置き換えないようにと、ラテン語文型にドイツ語の単語を並べた聖書がつくられることになる。

聖書の近代語訳あるいはその印刷に対して、教会当局は常に危惧を抱いた。このことは18点に及ぶドイツ語聖書も例外ではない。特に「ケルン聖書」の出版事情からはこれを伺い知ることができる。この頃のオランダから北ドイツにかけての信仰事情、つまり後の宗教改革の底流にもなるデ

ヴォツィオ・モデルナ運動との関連で、この2種の低地ドイツ語聖書が印刷された可能性があったのである。正統カトリックの宗教都市でありながら、ケルンではカルトゥジオ修道会がこの教会内改革運動と関連があり、しかも修道会図書館の写本、例えば「詩編」が「ケルン聖書」の印刷に当って一部用いられたとの研究もなされている。このケースでは近代語訳聖書が「異端」を生むのみならず、彼等に利用される恐れさえあると疑われたのである。印刷に当ってはクヴェンテルの義父で帝室造幣局長官のヨーハン・ヘルマンらによって出版シンジケートが形成され、ニュルンベルクのコーベルガーもその一員であったこと、その結果挿絵版木は1483年の彼の聖書に転用されたことなど、ここでは詳細は省くことにしても、ケルン聖書だけは2種ともに序文に聖ヒエロニムスの名が記されることはないことを付記しておこう。また奥付には印刷地、印刷者名だけでなく、印刷年さえ見られない。これと符合するかのように、1479年3月18日付で教皇シクストゥス四世はケルン大学に小勅書を送っている。大学が異端の印刷物と購入者、読者に断固たる措置をとったことを賞賛し、今後は貴大学に検閲権を認めよう、と。

参考文献

(本稿執筆に当り特に5を、人名および書名の表記については7を参考にした)

1. F. Dörling, Wertvolle Bücher (Auktionskatalog 122,125,129,131) Hamburg/1987-89
2. F. Geldner: Ein in einem Sammelband Hartmann Schedels (Clm901) überliefertes Gutachten über den Druck deutschsprachiger Bibeln, in: Gutenberg-Jahrbuch/1972
3. I. Hubay: Incunabula Eichstätter Bibliotheken Wiesbaden/1968
4. W. Kämpfer: Studien zu den gedruckten mittelniederdeutschen Plenarien Münster u. Köln/1954
5. H. Reintzer: Biblia deutsch Hamburg/1983
6. Ph. Schmidt: Die Illustration der Lutherbibel 1522-1700 Basel/1962
7. 中世思想原典集成 別巻(中世思想史、総索引) 平凡社 2002年
8. 事典類: Lexikon des Mittelalters; Lexikon für Theologie und Kirche; Religion Geschichte und Gegenwart; カトリック大辞典 [富山房]; 新カトリック大事典 [研究社]; キリスト教用語独和小辞典 [同学社]

† 明治大学図書館収蔵「木版挿絵入り西洋初期印刷本零葉コレクション」は、揺籃本を中心に約 70 作品 120 点の印刷本から木版挿絵入りの零葉を集めた個人コレクションである。そのうち約 160 葉は 1995 年に東京都町田市立国際版画美術館に、そして今回「コレクション」の核を成す約 800 葉が本学に収められた。ヨーロッパの初期印刷本や当時の木版画の研究にとって貴重なコレクションである。本稿で挙げた聖書、宗教書、信心書のうち、「コレクション」に収められる零葉を以下に挙げるが、この他にも 3「イエス・キリストの生涯の積義」、20「^{アルス・モリエンヂイ}往生術」、44-45「死の舞踏」、53 ヒエロニムス「書簡集」、77 ヒルデスハイムのヨハネス「聖三王の書」などが含まれる。(数字は「コレクション」の整理ナンバー)

近代語訳聖書 : チェコ語訳 10「クッテンベルク聖書」; ドイツ語訳 11「ツァイナー聖書」; 12「ゼンゼンシュミット聖書」; 13「ケルン聖書」; 14「ゾルク聖書」1480 年; 15「グリュニンガー聖書」; 16「シェーンスペルガー聖書」1487 年版; 17,18「オトマール聖書」1507 年、1518 年版; 19「(版不明)」

ヤコブス・デ・ヴォラギネ : 113-114「黄金伝説」; 115-119「諸聖人の生涯」; 120「キリストのご受難」

その他の宗教書・信心書 : 49-50 グイレルムス「使徒書簡および福音書註解」; 51「聖人物語」; 54-56 ヒエロニムス「初期教父伝」; 59-65「時禱書」; 81-83 ザクセンのルドルフス「キリストの生涯」; 91「ミサ全書」; 100 シュテファン・フリードリッヒ「^{ぼこ}宝石筐」; 104-105「人類救済鑑」